

新約聖書 マタイによる福音書 4章1節—11節 (新共同訳)

¹さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。²そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。³すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」⁴イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」⁵次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、⁶言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、／あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなただけを支える』／と書いてある。」⁷イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。⁸更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、⁹「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。¹⁰すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。」¹¹そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「霊に導かれ」

本日の福音書は、イエスが悪魔から誘惑を受けるために、“霊”に導かれて荒れ野に行った場面から始まります(マタイ 4:1)。イエスを荒れ野に導いた霊とは、神の霊である聖霊です。すなわち、イエスが悪魔から誘惑を受けたのは、神の導き、神の意志であったということです。

荒れ野に導かれたイエスは、そこで四十日間、断食をします(マタイ 4:2)。聖書において、四十という数字は、試練・苦しみ・準備の期間を表します。四十日、四十夜はノアの洪水の日数であり、モーセが断食をしたりエリヤが神の山を目指して歩いた日数です(創世記 7:12、出エジプト 34:28、列王記上 19:8)。荒れ野におけるイスラエルの放浪も四十年間でした(出エジプト 16:35、使徒 7:36)。

イエスは、四十日間の断食の後、空腹を覚えました(マタイ 4:2)。この時を狙って、悪魔がイエスを誘惑します。悪魔は、三つの誘惑をもってイエスに迫ります。この三つの誘惑のすべてにおいて、悪魔は、「もしあなたが～なら」という言葉をもってイエスに接近してきました。悪魔は、外側からの暴力をもって人を屈服させようとはしません。その人の内に入り込み、その人の内に潜むものを巧妙に引き出そうとします。人の心の奥にある、神への背きと薄暗さを、本人が自ら引き出すように仕向けるのです。

空腹のイエスへの、悪魔の第一の誘惑は、「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」というものでした(マタイ 4:3)。この悪魔の言葉の日本語訳は、男性的な印象を受ける言い回しです。ですが、もしかするとこの悪魔の囁きは、天使のような涼やかな声での「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうですか」という優しい言い方だったかもしれません。

人間にとって、空腹ほど苦しいものはありません。私が昔読んだ歴史小説で、牢に捕らえられた者にとって、暴力や拷問よりも最も苦しいのは飢えであった、という記述が印象に残っています。

悪魔の誘惑に、イエスはこう答えます。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある」（マタイ 4:4）。これは、旧約聖書 申命記 8 章 3 節の引用です。この言葉は、人間がパンを食べることを否定しているではありません。肉体を養うために、パンは必要です。しかし、肉体の維持が命のすべてではなく、人はパンだけで生きるものではありません。人は、神の言葉によって養われ、初めて、真実の命を生きるのです（申命記 8:3）。

石がパンになるように命じたらどうだという第一の誘惑で、イエスは悪魔を退けるのに聖書の言葉を用いました（申命記 8:3）。それに続く第二の誘惑では、今度は悪魔の方が聖書の詩編（91:11-12）の言葉を用いてイエスを誘惑しようとしています。悪魔は、エルサレム神殿の高い屋根の端にイエスを立たせて、そこから飛び降りてみよと唆（そそ）のかします。その時に、もっともらしく聖書の言葉を用いて説得しようとしているのです。神が徹底的に保護してくださるのであり、たとえ高いところから飛び降りても天使が支え、あなたの足が石に当たらないように守ってくれると聖書に書いてあるのだから、飛び降りてみたらどうだ、というわけです。

しかし、この第二の誘惑を、イエスもまた聖書の言葉を用いて退けます。それは「あなたの神である主を試してはならない」という言葉です（マタイ 4:7）。

新約聖書のヘブライ人の手紙 11 章 1 節にあるように、信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。まだ目に見えていないものを確信し、それを事実として確認することが神への信頼であり、信仰なのです。

また、神が守ってくれるのだからそこから飛び降りてみよというこの悪魔の誘惑は、「狂信」への誘いでもあると思います。狂信とは、信仰や思想への、理性を失った盲目的な傾倒を表す言葉です。

イエスは、この悪魔の第二の誘惑を退けることによって、真（しん）の信仰とは何か、を示しました。

最後の、悪魔の第三の誘惑は、人間の支配欲や名誉欲を引き出そうとするものでした。悪魔は、イエスが瞬時にして全世界を手中に治める方法を提案します。それは、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら」というものです（マタイ 4:9）。神の計画は長い時間を見据えています。悪魔は一瞬で成功することを人間に約束します。

しかしイエスは、「あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ」と、申命記 6 章 13 節の言葉をもって、悪魔の第三の誘惑をきっぱりと拒絶します。それは、拝むべき相手、仕えるべき相手は主なる神お一人だということです。ここに「あなたの神である」と表されている主なる神と、私たちは、どこまでも誠実な交わりを保ち続けなければならないのです。

さて、3月も近づき、最近はだいぶ日も長くなってきました。

先日、子供の頃に読んだこのような物語を、ふと思い出しました。

主人公の女の子が、心を込めて丁寧に、幼い妹の服にボタンを縫いつけてあげました。そののち、その服を着た妹が高い所から落ちるという事故を起こした時、落下する途中で、女の子が妹のためにつけてあげたボタンの部分が、どこかに引っかかって妹の体を支えたことで、妹は下まで落ちず、妹の命が助かったのです。

女の子が、心を込めて丁寧に縫いつけたボタンだったからこそ、引っかかった時にちぎれずに、妹の命を救ったのです。

縫い物でボタンを丁寧に縫いつけるということは、一見すると地味で小さなことに思えるでしょう。しかし、決してそうではなかったのです。

一つのボタンを心を込めて丁寧に縫いつけるというささやかな行いは、おそらく悪魔が推奨することではないでしょう。

悪魔は、もっと華々しいもの、大きなこと、即座に人々を感嘆させ支配するような事柄に、人間の目を向けさせようとするのだと思います。

しかし神様は、私たちが、目立つわけでもなく名誉を得るわけでもない、ささやかで小さなことを、愛を込めて行うのを喜んでくださるのです。

私たち人間は、日々、自分自身の個人的な事柄から、世界の情勢や災害のことなど、あらゆる不安や恐れを持ちながら暮らしていると思います。まだ起きていない事柄に対して、もしこうなったらどうしようと不安を感じることも多いでしょう。

ですがどんな時も、この女の子が妹の服のボタンを縫いつけたように、目の前のささやかな小さなことを愛をもって行うことで、私たちは心の平安と幸いを得ることができるのだと思います。

私たちは、悩みや心配事で心がいっぱいになってしまいそうな時も、神様がいつも私たちと共にいて導いてくださることに信頼して、心に希望のともし灯をともし続け、心朗らかに日々を生きて行きましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。欠乏を手軽に埋めてしまう誘惑から、私たちをお守りください。見えないところで働かれるあなたの愛に信頼して、私たちも日々を丁寧に生きることができるよう。御子イエス・キリストによって祈ります。
アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 創世記 2章15節—17節と3章1節—7節（新共同訳）

¹⁵ 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。¹⁶ 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。¹⁷ ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

^{3:1} 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」² 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。³ でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」⁴ 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。⁵ それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

⁶ 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。⁷ 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 5章12節—19節（新共同訳）

¹² このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。¹³ 律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。¹⁴ しかし、アダムからモーセまでの間にも、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかった人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。

¹⁵ しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。¹⁶ この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合は、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。¹⁷ 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。¹⁸ そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。¹⁹ 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。

教会讃美歌 71番「とうとき主イエスの」、151番「ひとの目には」、254番「つかれしものに」、238番「いのちのかて」。